

# 馬英九の



▶下

中国国民党のエリートとして台北での生活が長い外省系（中国大陸籍）の馬英九氏。地方経験がないことが弱みとされ、選挙戦に向け、台湾の地元文化に漬かり、台湾生まれの大衆に自身を売り込む必要があった。そこで総統選を8カ月後に控えた昨年7月、馬氏は「台湾人意識」にすり寄る自分自身の「台湾化」に本腰を入れた。

「ロングステイ計画」。3カ月にわたって各地の民家を泊まり歩き、田植えや野菜売りなどを体験、「台湾人意識」を肌で経験する一方、台湾人が外省系に抱く反感を体当たりで溶かす選挙戦術だった。スタートは国民党出身の大物政治家、胡志强氏が市長を務める台湾中部の台中。順調な滑り出しを見たが南部への転進を前に馬氏は警備当局からある忠告を受け、頭を抱えた。

「安全確保には防弾チョッキの着用が必要です」。真夏の南部といえど、40度を超える猛暑となる。そこでいかめしい防弾チョッキを着れば、大衆との間に自ら「壁」を作ることになる。しかし、南部は与党、民主進歩党の支持基盤で、一党支配時代の住民弾圧事件などから「反国民党感情」はなお根深い。「万一の事態」に備えるという警備当局の忠告には道理があった。馬氏は一昼夜、悩みに悩んだという。そしてチョッキ着用の見送りを決めた。「台湾人を信じたい」と。

## 融和の裏に背負う「十字架」

「中国人か、台湾人か」。馬氏は複雑な歴史が台湾住民にもたらす感情のわだかまりを乗り越えようと、不得意だった台湾語も上達した。総統選では史上最高の得票数を得たが、「防弾チョッキ」をめぐる決意こそ、勝利に向けた第一歩だったかもしれない。

振り返れば民進黨の陳水扁氏が総統選で勝利し、国民党からの初の政権交代を実現した2000年が、台湾中の選挙を「緑」対「青」の対立の構図に明確にした分水嶺だった。

台湾人意識を前面に押し出した民進黨など与党のシンボルカラー「緑」と、外省系など中国大陸に強い関心をもつ国民党など野党の「青」。04年の総統選では与野党の得票差が0・228%で、台湾住民は真っ二つに。台湾人意識は民主化を進める原動力ともなったが、台北など北部は青、高雄など南部は緑にくっきり色分けされ、地元紙は「中国に返還された香港は『一国二制度』、台湾は『一島二国』だ」と書き、「緑」と「青」の溝の深さを指摘した。

「馬氏は仮に選挙のパフォーマンスだとしても、緑か青かとの問題に終止符を打ち、『融和』を求めていると感じた」。馬氏支持にくら替えした台湾人たちは口をそろえた。2つに分かれた川は、馬氏の下で1つの流れに戻ろうとしているように見える。

ただ、国民党政権が、かつてのようない「外省人優先」策をこっそり持ち出さないと限らない。その場合は、台湾人からの反発は想像を絶するだろう。馬英九氏が背負う「十字架」がここにある。

（台北 長谷川周人、河崎真澄）